

公民館だより

由良地区 公民館 2号 52121

明るい住みよい社会に

館長 藤本 秀雄

私たちが日常生活していく際、お互いの利害は必ずしも一致しません。そんな時に相手の立場にも立ってものを考える人間になり、その利害を調整し、自他共存の生き方を……、のです。そこで市民の交流と連帯感が深まらなければなりません。すべての人が人間として、生きがいを感じる世の中にならなければなりません。

よい地域社会の一員となるためには、いろいろな考えをぶらわることかあると思いますが、次の点も大事なことでないでしょうか。

一 自主性と協働性

人間は自分と大切にすることは大変必要なことです。決して利己主義ではありません。生きていく間の努力は如何にでもなります。世論に惑わされず、集団の圧力や、利害だけに動揺せず、自分の頭で考え、正しいことは勇気をもって発言し行動すべきです。

また、反面他人の意見や話もよく聞いて、もし意見が衝突した場合、自分の方に非があれば改めることにも勇気があるべきです。

二 親切と感謝

人に親切にすることも大事なことです。親切はこの世の潤滑油ともいわれます。但し親切にしたらかえりとして、そのお返しを求めてはいけません。また、我々の生活は自分一人ではなく、多くの他者によって支えられ動かされています。一人の親切に対する感謝は勿論、天地、人等々多くの恵みに対して充分感謝すべきだと思います。

こうした精神的な盛り上がりは、地区の皆様のご理解とご協力による事は勿論だが、それぞれにお話をした公民館理事さん、歌身的な指導の賜物であり、尚その上に由良自治会の援助が成り果てたればこそと思います。

次に老人体育を見学してはなりません。最近、老後の健康は果のみにたどる者の危険性が指摘され、自らの体力づくりの必要性が強調されるようになってきました。先日の由良老友会の席上で婦人会長が即席で老人向けの簡単な体操を指導され感激しました。それに興奮にその場立ち上がり、体操に励みられた老人達の若々しく色つやの良さが印象的でした。この事は婦人会長の心づかいが老人達の気持ちに通じ、合わせて老人達の健康に対する願望が次第で交錯する微笑ましいシーンとなったのだと思います。そこに公民館の一つの理想像を見たような気がしました。

一言一行

真実 一郎

十一月十九日(日)宮津高校生(約四十人)が由良神社を清掃した。また、聞くところによると、すでに八月十日(水)福知山共栄高校生が一日がかりで由良浜を清掃、河口から脇まで約一キロの海岸を海に入り清浄の危険物や火気など拾い集め、取り去って美しい浜辺にしてくれた。

これらの事は若い人達のボランティア活動の一端だ。たかも知れない。私は最近の若者に「思いやりがない」「エゴ」だとか、「ハイジャック」「暴走族」等と、とかくの悪評が流れてきた。時に、明るいニュースを聞くことが減ったような気がする。

しかし、私達も環境に馴れすぎ、まわっている事も考えなくてはなかなうか。昔やがた、夏の浜辺、みんな喜んで走り回って、くれた浴衣も姿を消し、わずか三ヶ月の経過後、浜辺は砂浜を流し、流れよった(捨つられた?)汚物で変化した浜辺は哀れにも無い。利用するだけ利用し見返りもしない海、哀れという外なし。

今年の公民館所感

主事 平間 克己

暦の上では既に立冬を過ぎ、年暮はかきか街に降り出される。今年もあつた。わすかたという実感が寒さと一つになつて膚に沁みる。今年も晴天に恵まれ公民館の行事もスムーズに終つた。

念願だった史蹟めぐりも、歴史を歩く会、婦人会、文化部長の参加で実現した。遠く祖先が信仰を生活の基盤とした中で、公僕による芸術品の崇高さ、格調の高さに感銘し、同時に都土の誇りと文化財に対して認識と責任を漸感した。

八月十四日の球技大会が炎天下で行われた。暑くもものかは——と力戦が展開され、調子に迷わぬと思われたが、突如思わぬ事故が二件起った。その中の一件は、時間的制約から安全に開する配慮が至らなかつたこともあり選手及び観客に心配をかけて申し訳なかつた。

九月十一日の地区大運動会は変化はええし、種目だとの評もあつたが、安全を期する意味あつてもめて止むを得なかつた。来年こそは、今年反省の上になつて、安心して楽しめる競技が出来るよう計画したいと思う。

公民館設立以来、三十年の歳月が過ぎようとしている。その間、地区の体育振興に少なからず役立つことが出来たように思う。青少年の健全育成、スポーツへと発展し、壮年層、参加に広がり更に公民館理事さんの剣道有段者による指導の熱意が小学生の少年剣士への指導を強め、練習は休みなく続き、一部の女生徒の参加ともなつて普及し益々盛んになっている。また、バレー、バドミントンの同好会が設立し、若し主婦達が育ち、家事、労働等多忙な中で、夕食後十時を惜しんで激しいトレーニングが出来るのは、大変喜ばしい。中でもバレー部は宮津市婦人バレーボール大会において、上位陣に食い込み毎年優勝チームにわすかたの在り情敵——という実力を発揮している。

こんな哀れな海こそ地区の私達が根ざらつてやうて、いいのではないだろうか。

生活の合理化というお話

藤井 涼庭

「合理化反対」つい先日プラットホームの階段に近いつてみかけた。なげやりになつて無造作にこんなビラがはりつけられている。その横に「一枚のキツプから」と国歌を歌う声があつた。結局、合理化とは「楽して楽しむ」という人間のどん欲のシンボルに思えてならぬ。「一枚のキツプからあなたに夢を売ります」という意味のことと思うが、私にはなぜか合理化という言葉がいかに夢のないお話なのかよく知つていながら生活の場に合理化を押し出すことが多くあるのを痛感する。

「合理」なる語を辞書で引いたところ、「むだをはぶく」「道理、理論に合う」となつていた。おそらく生活の合理化といえは、前の「むだをはぶく」の意味に取られていゝものと思う。フェルマーは最少作用を先だとしていた。先ほども短いコース以外は通らないというのである。なる程みかりに何かのついでを立ててしまつと、めんどうくささうなつた。これを反対側面に光り送らうとしない。しかし「むだをはぶく」ことがこれに似ている。したらいかに不便なものかよくわかる。最も身近な例は由良駅ではないか。昔、駅で通勤列車に乗るたびに出ていく駅員の方が「こんばんは」とか「よつ」とか言つてくれ、生活のうるおいに役かつてくれた。ところがこれまた合理化のために無人駅。無常感がたつたよう。

幸福とは何かと思う。幸福についてある人は「適応状態」をさすものとしてゐる。しかもそこには、快適さがあり、喜びが必要だとしてゐる。こんな時、生活の合理化だとさわつた。暮しの知恵をしばらく倦怠と刺激、流行とかげ、どん欲(取り入れた)とケチ(失いたくない)をおい

求めている生活の内容、態度そのものが最も幸福のみなもとを考ふる。しかし、夢さめた合理化のあとに残されたものは、個人生活においては、ほとんど問題にはならないが、集団、組織の中にあつては、ヘルマーの言う通り不便なものであり、不合理なのである。

生活の合理化を問題にする時、まず価値を求め、何が価値があるか、そしてその価値が便利であるか、人間の機械化を意味するものであるにせよ、要するに最適であらねばならない。そのために価値研究の第一歩は、価値があると思われるものを集めてみることに始まる。そこで生物学的な適応で、好ましい、とする点と社会的な適応で、うまくいくとする点とを、合理化とは共に相反するにちがいないと思ふ。私達の暮しの知恵を問題にする時、例えは泣かぬで玉ねやを切る方法として、磨品利用のナイロン袋を利用して自かくしをするとか、石けんの上手な使い方として店を売られてはいる網状のリング入れを水道にぶら下げておくとか、云々……、こんな合理化はまだまだ人間らしくない。価値の見出し方によつては人間を機械化して、都合的を我欲知せずまで成におちいり、いやその方がより合理的になるからだと考ふる。

投稿規定

- ▼ 紙面のペンネームは可とするも、原稿には、必ず住所・氏名を明記すること。
- ▼ 原稿に関する取扱はすべて編集部に一任のこと。
- ▼ 投稿は四百字詰中判(A4)原稿用紙を使用し、楷書のこと。なお、原稿用紙二枚以内とする。
- ▼ 締切りは、二月、五月、十月のそれぞれ末日とする。
- ▼ 原稿送付先は左記宛
宮津市由良公民館文化部長 中西 英夫

原稿送付先は左記宛
宮津市由良公民館文化部長 中西 英夫

思い出(五)

中西 茂

(一) 沢井市造公羽銅像除幕 大正三年

沢井市造翁は由良の産んだ明治初期の実業家で、「沢井組」と言つて大阪で土木請負業を以つて成功した人であり、今でもその精気が由良の資料館にある。逸話も仲々多い。

ある人が、沢井さんと「沢井比」をいふ。約束の日になると、相手が喋りだして、どうしたのかと聞くと、沢井さんは、私は向こうに見える大島まで三千軒泳ぐつもりで舟を三食分用意して来たと言つたので、流石の相手が降参したと云うのである。

銅像は、脇の稻荷神社の前の公園に建てられた。当日は、大きな天幕をたて、柱を紅白の布で包み、中には西洋婦人の記念服にボンネットのついた帽子をかぶつた貴婦人が数人あり、タキシード服の紳士が多数いた。残念ながら私も幼かったので、除幕式の様子はあまり覚えていない。除幕式が終わると公園から海岸に向つて突き出した棧橋から、砂浜に待機する村の大ぜいの人達に、紅白のお餅を沢山撒いたのを覚えてゐる。銅像は下の敷石が広く鏡のように磨かれて、圓いがしてある。

しかし、この銅像は、太平洋戦争のときよと出され、あとに小さな百像が僅かに面影を残している。

(二) ス・ヘイン風邪の大流行 大正八年

このときのスペイン風邪の経緯は、世界中を風びした。全世界で三千万人日本で二十万人の死者を出したと言われる。由良にも大流行して四十才前後

宮津市家庭婦人バレーボール大会に参加して 玉垣泰子

十月三十日宮津市学校においてバレーボール大会があり、私も出場者の一人として参加させて頂いた。大きかったです。

まず一回戦二回戦は、文句なく勝ち、準決勝へと進みました。準決勝の相手が過去十年間連続優勝を占めていた栗田Bチームとあたりました。相手にとって不足はありませんが、みんなの頭には栗田は強いという先入観があり、少しとまどいました。

間もなく一セット目が始まり、由良の出足はまずまずといったところでしたが、やはり相手が栗田という事もあり、少しかたくなり二十一対十八でセットをとられてしまいました。二セット目は、今年こそ栗田を倒せ、由良が勝て、そうや、由良勝て、という力強い応援もあって、二十一対十八で今度は由良が勝利しました。

いよいよ三セット目です。由良は、エース中西さんの大砲のようなものすごい強さをサーブがストロンスドロンと決まり、十一対五と大きくリードしました。レシーブも、スパイクも練習の時よりはるかによかったです。栗田もそろそろあまくはありません。ジリジリとおいてきて十九対十七まできました。この時、このままでは栗田に負けてしまう、何とかしなくては、というみんなのあせりが、ホロボロとミスが出はじめ、どうしてジュースになってしまい、ジュースが二回くりかえされ、あと一本で由良が優勝という場面になり、体育館の中は「由良がんばれ」という声援でいっぱいでした。が、その声援にこたえられず残念ながら負けてしまいました。

なお、当日の出場選手は次の通りです。(順不同、敬称略)
中西鶴子・中西巴・大林京子・吉田愛子・小室三恵子

私の父は後場の活躍をしていたが、「今日は何人亡くなった」と毎日ほど帰って報告していた。私の知っている人でも「岩上松太郎さんのお母さん」「田畑吉之助さんのお父さん」「松本三助の寅之助さん」等々がある。隣の寅之助(今は無い)のおじさんが亡くなった時は、おじさんが「来てくれなむ」と絶叫したことが耳を離れない。

私達の隣組では、毎晩クルーザーで隣組を回っている路地を、提灯で照らし、提灯をジャンジャンと鳴らし、次のようなお話を一輪に鳴るながら三回廻った。雨の日も風の日も――

おんおんあはきやー びるうしやの
まのわたら まにはんのみ
じんばら はらばれたや。

由良地区申し合わせ事項

- 仏事の簡素化
- 一、葬式、忌明け、初七日の行事は、葬式当日のみとする。
 - 二、食事は当日食べられる程度とする。
 - 三、焼物は破格二袋を限度とする。
- 見舞返しは自費とする。
- 時間厳守
- 一、会合の時刻におくれないうようにする。
 - 二、欠席、遅刻は必ず事前に届け出る。
 - 三、遅刻者にかまわず定刻に開会する。

※ 昭和五十二年七月十三日、公民館、自治会、老友会、婦人会による「生活の合理化」を話し合う会で、昭和四十年の申し合わせ事項の一新訂正と確認をいたしました。